

広島教会の沿革

1. 伝道の始め

1881（明治14）年7月中島留吉伝道師が来広、天神町に講義所を開設し広島で最初のプロテスタント基督教の伝道を行った。住民の激しい抵抗と迫害に遭い、不売同盟、住居への投石、伝道者への暴行等が相次ぎ命がけの伝道であったが翌年2月、妻花子が心労のため7ヶ月で流産死去、我国プロテスタント伝道史上最初の殉教者となった。その墓は市営比治山墓地のほぼ中央部に今も立っている。その年6月に2名が洗礼を受け教会の初穂となった。さらに9月に5名が受洗し、翌年の教会設立へと繋がっていく。



2. 教会の設立と会堂の建設

1883（明治16）年11月28日、広島日本基督教会の設立が行われ、高木熊次郎が初代牧師に就任した。信徒数は19人であった。翌々年会堂建設の議が持ち上がり、下中町に土地を購入、その翌年6月、郊外井室の酒蔵庫を移築改装して教会堂とした。会堂が完成した翌月、1886（明治19）年7月、山口教会の創設者服部章蔵牧師を迎え教勢は大いに進展した。



3. 教会の自立とその後の浮沈

服部牧師の後を留川一路牧師が引き継ぎ、教勢はさらに進展し、独立自給の態勢を整えた。明治政府の欧化政策の流れに乗って受洗者が50名に及ぶ年もあったが、その反動が来て国粹主義の昂まりと日清戦争の影響もあって教勢は伸び悩み、自給が困難な状況が続いた。伝道局から送られて来る牧師が次々に交代、1903（明治36）年赴任してきた星野又吉牧師の時ようやく安定、再び自立を達成した。

4. 教会存立の危機と東広島伝道教会との合同

7年間続いた星野牧師が辞任し、その後任を巡って教会内に対立が生じ、その結果教会は極度の不振状態に陥った。朝礼拝夕礼拝共に1けた台となり、自立を諦めかけた時、心配した下関の貴山幸次郎牧師の斡旋により、1910（明治43）年11月、1年半ぶりに松山から鈴木高志牧師を迎えることができた。折りよくアメリカの長老派のヘレフォード宣教師夫妻が広島に来任、広島教会の強力な支援者となった。彼の仲介により東広島伝道教会との合同が実現して会員数が80余名となり、1913（大正2）年11月、創立30周年の記念式典を盛大に開くことが出来た。



30周年記念写真（男）



30周年記念写真（女）

5. 新会堂の建設と大正昭和の歩み

鈴木高志牧師は教会の再興に大きく貢献したが、3年半で辞任、朝鮮伝道のために旅立った。教会はまたも無牧となり、定住牧師が得られず、会員の流出も相次いで甚だしい苦境に陥る。自立を諦めかけた時、呉教会の小川国三牧師の斡旋により、1918（大正7）年11月下関教会から和田方行牧師を迎え教会はようやく往年の生气と安定を取り戻した。その頃レフォード宣教師の敷地提供の申し出を受けて新会堂建設の議が持ち上がり、数年の準備を経て1924（大正13）年5月、鷹野橋の電停前に新会堂並びに牧師館を建設した。昭和に入り盛んな伝道活動の結果礼拝出席は100名を超えるに至ったが、時代は次第に軍国化へと傾いていく。

鷹野橋に建設された会堂（現中区国寿寺町）
1924（大正13）年建築
1945（昭和20）年原爆で焼失

6. 戦時下の教会と日本基督教団への加盟

中国との15年戦争さらには1941（昭和16）年12月に始まった米英との太平洋戦争の渦中であって教会もまた戦時体制の中に組み込まれていく。国家の宗教統制をねらった宗教団体法が1939（昭和14）年に帝国議会を通過し翌年4月施行された。その影響を受けて、1941（昭和16）年6月基督教諸教派の合同による日本基督教団が成立し、それまで日本基督教会に所属していた広島教会もそれに加入した。戦後、成立の動機への疑念から教団を離脱する教会もあったが、広島教会は教団に留まることを決断し、今日まで日本基督教団広島教会として存続している。和田牧師は教団中国教区の要職も兼ねて戦時下の教会運営に苦心していたが、1942（昭和17）年3月老齢を理由に辞任、同年7月松江今堀教会から四竈一郎牧師が来任した。当時会員数112名、礼拝出席50名前後であったが、戦局が逼迫するにつれ疎開等で会員は散り、1945（昭和20）年4月、会堂も防空用建物として接收され、牧師館でようやく数人の聖日礼拝を守っていた。

7. 原爆被災と戦後の復興

1945（昭和20）年8月6日原爆投下により広島は壊滅した。爆心から約1キロの広島教会も倒壊焼失、この被災により牧師の長女を含む会員33名の命が失われた。原爆の傷は余りにも深く教会の復興は容易ではなかったが、翌年5月郊外の五日市の玉垣宅で主日礼拝が再開され更に市内礼

戦後、教会敷地に建設されたジュラルミンの仮会堂
1946（昭和23）年建築

拝が東光宅で持たれるようになった。そして 1948（昭和 23）年 8 月元の敷地にジュラルミンの仮会堂が建てられ、被災後実に 3 年ぶりに教会堂での礼拝が行われるようになった。市の復興と共に多くの人々が教会に集まるようになり、原爆を生き延びた四竈牧師も渾身の力を傾けて牧会に当たったので、礼拝出席は 100 名を超え、教会学校、諸集会も充実した。

8. 教会堂の建設と牧師の交代

会員数が増え教会活動が盛んになるにつれ、本格的な教会堂建設の機運が高まり、1956（昭和 31）年 1 月の臨時総会で会堂建築の議が可決された。場所を現所在地に移し、換地による資金を元に献金を募ることとし、4 年余の歳月をかけて建設を完了、1960（昭和 35）年 9 月献堂礼拝を行った。新しい会堂を得て宣教活動は活発となり、特に付設の学生寮を中心に青年会活動が充実した。四竈牧師は一人で牧会に当たってきたが、1963（昭和 38）年以降、筒井洋一郎伝道師、北沢良夫副牧師、尾形隆文伝道師を相次いで招き若い人たちの指導に当らせた。しかし次第に自分の限界を覚え、1971（昭和 46）年 3 月広島教会を辞任隠退した。30 年近くに及ぶ広島教会では最も長い在任期間であった。その後 1 年の無牧期間を経て盛岡青山町教会から山田有利牧師が来任した。



現会堂

献堂礼拝時の写真

9. 教団の動揺と教勢の停滞

教団は 1954（昭和 29）年 10 月、日本基督教団「信仰告白」を制定し合同教会としての態勢を整えたが、さらに 1967（昭和 42）年 3 月、「第二次世界大戦下における戦争責任についての告白」を発表した。その後 70 年「安保闘争」で世の中が騒然とする中、教団も万国博問題、東神大機動隊導入問題等を巡って動揺し、全国の諸教会の宣教活動にも少なからぬ影響を与えた。山田牧師は世に仕える教会という立場から社会的関心の強い牧師であったが、他方牧会伝道にも力を注いだ。しかし他教会同様教勢は伸び悩み、礼拝出席は漸減して 40 名余りとなった。内外とも多難の 10 年であったが、1982（昭和 57）年 3 月辞任して青森十和田市の三本木教会へ赴任した。

10. 創立 100 周年と教勢の立て直し

1 年間の無牧を経て新潟市東中通教会から若い古屋治雄牧師を迎えた。古屋牧師は福音主義の伝統に立って礼拝中心の教会形成に励み、10 年後には礼拝出席は 70 名まで回

復した。1983(昭和 58)年 11 月、教会は創立百周年を迎え、記念礼拝を行うと共に「広島教会百年史」を刊行した。また教会月報「シャローム」の刊行を始めそれは今日まで継続し、会員の交流、伝道に貢献している。広島教会は昔から近くの広島大学の学生が多く集まる教会であったが、大学の東広島市への移転に伴い、青年会活動が大きな打撃を受けた。しかし残った青年たちによる聖書輪読会が毎週礼拝後に自発的にもたれるようになり、今日まで大きな力となっている。婦人会壮年会も活発に活動し、教会運営を支えた。教会が上向きになった時点で、古屋牧師は 1994（平成 6）年 3 月辞任、千葉柏教会へ赴任した。

1 1. 創立 120 周年と被爆教会としての証し

1 年後 1995（平成 7）年 4 月、秋田檜山教会から櫻井重宣牧師を迎え、教勢は更に進展し、5 年後には礼拝出席が 100 名を超えるようになった。教会内の組織が整備され、会員すべてが伝道奉仕に参加するようになったためである。2003（平成 15）年 11 月教会創立 120 周年を記念して、「広島教会百二十年史」並びに「あの日あの時」を出版、後者は被爆体験を中心に会員の戦争体験を編集したものである。教団は 8 月第一聖日を平和聖日と定めているが、広島教会はこの日を中心に会員による被爆証言の会を毎年開催しており、全国各地から来る「ヒロシマへの平和の旅」を受け入れ、被爆教会としての証しを行って来た。櫻井牧師は礼拝の充実、会員一人一人へのケアそして平和への取り組みにも尽力したが、2007（平成 19）年 3 月家庭の事情もあって辞任、神奈川の茅ヶ崎教会へ転任した。



1 2. そして今

3 ヶ月の無牧の後、2007（平成 19）年 7 月、名古屋金城教会から武田真治牧師を迎え、教会は今活気ある新たな歩みに入っている。現住陪餐会員 158 名、主日礼拝出席平均 110 名、夕礼拝 18 名、祈祷会 16 名である。